

古代アテナイにおける劇場と公共性について

Relationship between theater play and the publics in ancient Athens

学籍番号

47-176828

氏名

西村 蒼 (Nishimura So)

指導教官

岡部 明子 教授

1. 研究概要

1-1. 演劇と政治についての既往研究

政治や公共性を考え直す際に、演劇はこれらと縁のないものと考えられている。しかし昨今の地域芸術祭や劇場運営論において演劇と政治、公共性の関係について議論が活性化している。メルヒンガー (1971) は政治演劇を定義し演劇史から政治性を再発見したが、彼の言う政治は下層階級から上層への権利獲得闘争という限定的なものだった。一方セネット (1991) は 18 世紀のロンドン、パリの演劇と公共性を調査し、公共性を親しくない者同士の絆と定義し、都市での公的な振舞いと演劇との親和性が非常に高いことを明らかにした。また、アーレント (1958) は古代ギリシアにおける公的領域について考察し、活動的の生 (労働・仕事・活動) のうち政治的行為と同値な活動のうち、行為者の固有名を事後に伝えられる芸術として演劇を評価している。演劇に特異な公共性とは、劇中行為者の活動とそれを鑑賞する者の活動が二重化している点にある。アーレントによれば活動とは言論と実践を伴うものなので、演劇の公共性

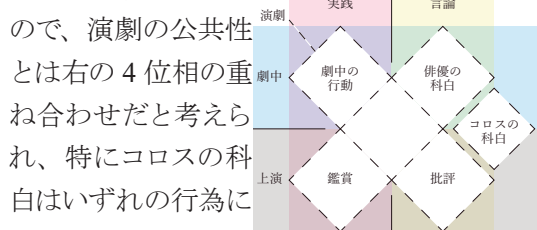


図1 演劇の4位相

とは右の4位相の重ね合わせだと考えられ、特にコロスの科白はいずれの行為にも属さない言論に該当する。しかしアーレントは古代ギリシアで実際にどう演劇がポリス内で行われ、どういう点で政治的行為なのかは明らかにしていない。

1-2. 定義、および研究目的・対象

定義: 公的領域を、自由な人が出会う場所、政治を、都市の公的領域で行う他者に対する行為とする。本論の目的は紀元前6世紀末-5世紀のアテナイの公共と演劇の関係を分析することで現代の公共性を問い直すことにある。研究対象は当時のアテナイでの公的行為と演劇行為であり、演劇の4位相に着目して、①観客である人々のいるポリスの政治、及び物理的な劇場空間、②悲劇作品のうち、公共性を考えるうえで重要な2篇、ソフォクレス「アンティゴネー」とアイスキュロスのオレステス三部作を調査する。これらの作品を、特にコロスに着目し分析することで、演劇が本源的に備えていた政治的な役割を解き明かす。

2. アテナイでの演劇と政治のかかわり

2-1. アテナイの地理と歴史的背景

当時アテナイはいち都市国家でありながらアッティカ半島東部を支配しており、最盛期の人口は30万人(うち市民は4万人)いた。

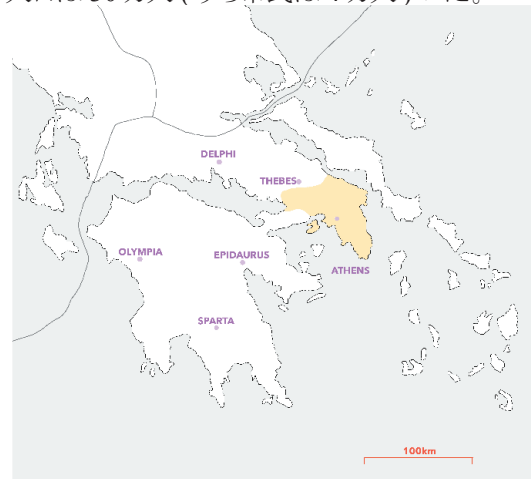


図2 アテナイの地理

渡辺 (2000)⁵によるとギリシアの劇場は紀元前6世紀末頃のアテナイで初めて建てられた。同時期にアテナイの国制は貴族制から民主制へと転換し、都市運営に携わる人数が非常に増大(アルコン9人+アレオパゴス評議会→市民4万人)した。同時期に民会を行うプニククスが作られた⁶ほか、数多くの祭儀が制度化した⁷。アテナイの祭儀は判明している限り42回、年60日を占め(表1)、悲劇の上演も大ディオニュシア祭の儀式として行われていた。

祭儀の開始において3つの行為を行う。①人々が町を練り歩き祭壇へ向かう。神々の彫刻の運搬、冷やかしやお祭り騒ぎを伴う。②祭壇で生贄が神々のために焼かれ、残りを参列者で分配する。③歌唱・舞踊・宴会など個々の祭儀に特徴的な儀式を行う。多くの場合市民以外の参列者も参加できる形であった。

神殿はふつう祭壇の前面にあるが、アテナイのアテナ神の神殿と祭壇の関係(図3)や、神殿を持たない祭壇の例を見ると、関係性は

厳密なものではなく、神の依り代としての神殿よりも、大勢の人が集まり生贄を捧げ、神と人との仲立ちを行う祭壇の方が重要であった。

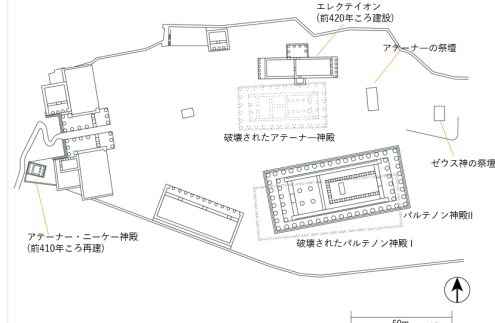


図3 アテナイにおける祭壇と神殿の関係

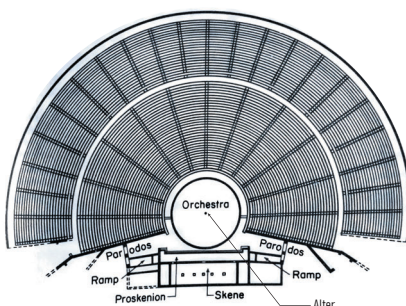


図4 エピダウロス劇場

名称	小名称	月	日	対象となる神	行われた場所	練り歩きの作法	生贄	宴会	特徴的なもの	参加者	競技会やコンテスト	出典	
クロニアス祭	ヘカトンバイオーン	12		クロノス	クロノスの聖域	クロノスの聖域まで行進する	羊	あり	奴隷たちの休日であり、主人たちと食事を共にする。また、昨年まで人々が所有していたもの所有権が今年もあらることが宣言される	奴隷も参加した		Festivals of the Athenians	
パンアテナーナイア祭		28		アテナー女神	エレクタイオン	アクロポリスまで人々が進む、馬も伴った	100頭の山羊や牛	あり	4年に一度大パンアテナーナイア祭が行われた	女性や奴隷も参加できた	合唱とスポーツ	ギリシア文明、ホモ・ネカオニス	
エレウシスの秘祭	Agyrnos	15		ポエドロミオーン	デーメーテール	テレステアリオン	30キロの道を、杖を払い、それを振り回すなどしながら進む	子豚を地下の部屋、あるいは洞窟(megara)に監禁投げる	なし	入信者を集める	女性、奴隷のどちらも参加できる	なし	Festivals of the Athenians
	Seaward, Initiates	16	入信者を海へ沐浴させ、清める										
	Hiher the Victims	17	入信者それぞれの生贄を捧げる										
	Epidauria	18											
	March to Eleusis	19											
Initiation	20					秘祭として知られている(といいつつ、毎年数千人の前で行われていた。)							
テモスフォリア祭	The road up The Fast Kalligenia	11 12 13		ゼウス	デーメーテールの洞窟	なし	子豚を殺し、洞窟に投げ込む	なし	女性が洞窟に入り、穀物の種と腐った子豚の性器とを混ぜる	女性のみが行う祭儀(奴隷、外国人も含む)	なし	古代ギリシア社会研究	
アンテステアリア祭	Pithoigia	11		ディオニュソス	聖所の前の広場	樽を選び入れる。	羊	あり	新しい葡萄酒が入った樽が持ち込まれ、葡萄酒を飲む	カーリア人の奴隷は参加が許されていた	なし	ギリシア文明、ホモ・ネカオニス	
	Choes	12		ディオニュソス	洞窟の中の(en Dumeis)ディオニュソスの聖所	-	羊	捧げられない	あり*	子供のための祭りでもある。また、この日は穢れの日この日の宴会は通常の宴会とは異なり、自分だけの卓を前に据え、自分のための水差しに入った葡萄酒1クース(200ml×12杯分)を飲んだ後、	葡萄酒の大飲み		
	Chytai	13		ディオニュソス、地下のヘルメス神	洞窟の中の(en Dumeis)ディオニュソスの聖所	-	羊	捧げる	あり	自分のコニーに花輪を載せ、聖域に捧げに向かう。そこにいる女祭司はこの目に照って祭りの役目を引き受ける女性である。パクスベルミアと呼ばれる食べ物を作り、これをヘカトニアに捧げる	若者によって、アテナコト、スポーツが行われる。		
エレウシス	小さな秘祭	20		デーメーテール	アゴラ付近の聖域	なし	子豚?	なし?	不明	女性、奴隷のどちらも参加できる	なし	Festivals of the Athenians	
プロアゴン		9						なし	大ディオニュシア祭に先立って行われ、その年に活躍した居る外国人をたたえた。また大ディオニュシア祭で上演される演目も発表された	市民のみ?	-	ギリシア文明、ホモ・ネカオニス	
大ディオニュシア祭	エラペーゴリオン	10		ディオニュソス	ディオニュシア劇場	彫刻を神殿に運び入れる	牛	あり	戦争風児の青年に贈られる				
		11				4つの部族同士の対抗で、合唱が行われる。		合唱のコンテスト					
		12				一日に一人の悲劇作家による上演が行われる		悲劇のコンテスト					
		13											
		14											
		15											
		16								劇中で市民集会、このときコンテストの結果が宣言される			喜劇のコンテスト
ピュリテア祭	タルゲリオン	29		アテナー女神、アルミス女神		なし	?	?	アテナー、アルミスの衣裳を洗い、新しいものを身に着させる	?	なし	ホモ・ネカオニス	
アレーフォリア祭		3		エロースのための聖所		なし	なし	なし	2人の、7-12歳の少女が1年間アクロポリスの館で暮らし、アテナー女神の外着を織る。祭りが近づくと、女祭司によって指示され、何かをアレーフォリア女神の聖域にもっていき、そこにあるものと交換していく。	少女のみが行う祭儀	なし	ホモ・ネカオニス	
ディーポエア祭	スキロフォリオン	14		ポリスの主ゼウス(Di polios)	ゼウスの祭壇、国策館	アクロポリスまで人々が進む	祭壇にある穀物の供物を食べた牛一頭	あり	祭と万物の裁判	市民のみ?	スポーツ	ホモ・ネカオニス	
スキラ祭		12		アテナー女神、エレクタイオン、デーメーテール	祭儀はエレクタイオンの中	天幕の下をエテオプターダス家による祭司が歩く	あり	あり(女性のみ)	女たちが婦人部屋を出ることのできる数少ない日。女たちの聖所に行き、自立した組織を作り宴会を開く	女性が中心となって参加する	なし	ホモ・ネカオニス	

表1 アテナイにおける祭儀の詳細

2-2. 祭儀空間としての劇場

・劇場の空間構成

劇場は1.2-1.4万人を収容する半円型の客席と円形のオルケストラ、そして俳優が演技したとみられるスケーネーからなる(図4)。祭壇はオルケストラの中央にあり、演技空間と観客席の間に存在した。オルケストラはコロスの歌舞のための空間だと考えられ、上演中は観客と俳優の間につねにコロスがいた。

・大ディオニュシア祭の概要・規模

大ディオニュシア祭は、初春に1週間行われ(次頁表2)、3つのコンテスト形式の儀式が行われていた。喜劇はレナイア祭で行われていたものが、前486年頃に合流したものだ。

悲劇の出演者はすべて一般の市民によって演じられていた。祭儀全体の出演者はのべ360人-530人に及び、アテナイ市民の1-2%であった。悲劇作家ごとに上演の諸経費を負担するアルコンが決まっていた。また悲劇の引用などが市民たちの会話に見られる。

小括

都市運営にかかわる人数が増加し、それらを共通関心でまとめる装置として祭儀があった。祭儀はすべて市民たちが主体的に行っていた。特に神と人びととの間に祭壇があり、演劇では俳優と観客の間にコロスがいた。

3. 悲劇に何が書かれていたか

3-1. コロスの役割

悲劇には集団的存在を演じるコロスと、一人の役を演じる俳優が出演する。俳優は3名で、それ以上の登場人物は一人二役で演じた。コロスは12-15人で登場人物の一人だが、科白

には登場人物が知りえない情報も含まれており、劇中で生きる存在であると同時にそれでは収まらない視点を有していた。現在まで残る悲劇32篇のうち、30例のコロスは成人市民ではなく、長老、女性のような「マージナル」な存在であった。残り2例も無産者級の市民であり、ポリスにおいて必要不可欠であると同時に排除されていた傍流の存在である。

3-2. ソフォクレス「アンティゴネー」

前442年に上演されたソフォクレス「アンティゴネー」には数多くの批評がなされている。ヘーゲルによればアンティゴネーとクレオーンの対立は、家族を司る「神々の掟」と組織を司る「人間の掟」の対立で、これらの個別なパトスを合一する共同体の精神の到来を期待するものとした。一方でラカンによればクレオーンが志したカント的善によって法の過剰が起き、そのような例外状態においてアンティゴネーに当為の場が現れたとしている。

この作品を当時の背景とコロスの存在から見ることで、以下のことが判明した。

- ①民主制下においてアテナイ市民と最も立場の近い人物はクレオーンであり、彼の行動と帰結は都市運営に対して反省を引き出せる。
- ②都市運営に形式的に参加できない者も、つねにすでに都市運営に参加している。
- ③アンティゴネーの行為は個人的行為で非政治的だが、それに公的領域の次元で干渉することで事後的に政治的行為が生まれえる。
- ④コロスはアルゴスの長老という、双方とは異なる視点から物語を俯瞰しており、観客に感情面と物語へのインデックスを提供している。

祭儀名	大ディオニュシア祭	開催月	ポエードロミオン	開催日	10日	-	16日
Day	1	2	3	4	5	6	7
出来事	練り歩き、犠牲獣の奉納	デューテュランボス	悲劇作家Aの上演	悲劇作家Bの上演	悲劇作家Cの上演	喜劇の上演	市民集会和コンテスト結果の発表
1回の演目の出演者の人数		30 - 50人	各日に一人ずつ、悲劇三篇+サテュロス劇一篇が上演された。各悲劇作家に3人の俳優が割り当てられた。コロスが1グループだったのか、それとも作品ごとに変更があったのかは不明である。			5人の喜劇作家による5つの喜劇が上演された	
出演組数	-	8 (4つの部族×青年の部と少年の部)	1	1	1	5	-
総出演者		240 - 400人	12 - 15人	12 - 15人	12 - 15人	90人以上	

表2 大ディオニュシア祭のプログラム

⑤コロスの反応は、中立であることもあれば感情をあらわにするところもある。聞くことの政治性は中立を保つことではなくリアクションを返すことも含まれている。

3-2. アISKYUROS「アガメムノン」、「ヒケティデス」、「エウメニデス」

これらは前458年に上演された三部作である。作品の焦点は、トロイア戦争後のアルゴスで起きた復讐の連鎖を終わらせる装置として、当時市民全体に権利拡大されたアテナイの実際の裁判システムを持ち出したことだ。ヘーゲルによれば個々人の対立を止揚することでアテナイの共同体の精神の達成を示したものである。

・分析

これらを分析し以下のことが明らかになった。
①復讐の女神は、いままで公的には現れておらず、例外化された表象されない複数の出来事を象徴していた。これを共通関心として公的領域に引き上げ、複数の人間によって行われる政治によって議論することが裁判システムだった。

②私的/公的領域はどちらもポリス運営にとって重要で、領域侵犯は泥沼の復讐の連鎖を生む。

③コロスははじめ物語と関係しない存在であったが、次第に物語への関与を強めてゆく(アルゴスの長老→復讐の女神)。傍観者が関与せざるをえなくなる劇構造と、それを見て判断するさらに外側の裁判による(劇中)市民の投票行為によって、つぎの2点を明らかになる。

A. 聞くこと自体も十分に政治的行為であり、誰かの活動に表明するの^{アクション}もまた活動である。

B. 泥沼化した領域においては、かえって何もせずただそれを眺める者にこそ強い当為の場が見いだされる。そのような行為がアテナイにおける裁判であり、劇場であり、演劇鑑賞であった。

小括

悲劇はそれじたいフィクションとして神話世界を題材にしなが、現在のアテナイにおける政治的行為としての立場を有していた。演劇はその中で鑑賞行為自体がすでに政治的行為であるということを前提に、登場人物の究極的状況を体現し、このような状況にある人物の固有性を

描き出した。彼らを共通世界における消失点として公的領域を基礎づけ、公的領域における市民としての振舞いを行っていた。その固有性に対し客観的なリアリティを保持するために、コロスの持つ複数の視点は効果的であった。

4. 結論

紀元前6世紀末のアテナイにおいて民主制と、祭儀、演劇が生まれたのには強い連関がみられる。人と神との間に祭壇があり、演劇においてはそこにコロスがいた。そこで仲立ちとなったのは俳優と登場人物の二重性ではなく、登場人物と観客の二重性を持った存在=コロスであった。コロスが劇中人物と観客を繋げることで、両者が同時に現れる共通世界を作り出し、人々の政治行為を基礎づけることに貢献した。そのような劇場で観客席に座り見聞きすることによって、観客と劇中人物を繋げる公的領域は立ち現れる。

注釈

- 1 S.メルヒンガー『政治演劇史』尾崎賢治・蔵原惟治 訳、白水社、1976年
- 2 リチャード・セネット「公共性の喪失」北山克彦・高階悟訳、晶文社
- 3 ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994年
- 4 フランソワ・シャム『ギリシア文明』桐村泰次 訳、論創社、2010年
- 5 渡邊道治「ギリシア・ローマ時代の劇場建築について」日本建築学会九州支部研究報告第39号、2000年3月
- 6 逸見喜一郎『ソフォクレス『オイディプス王』とエウリーピデース『バツカイ』—ギリシア悲劇とギリシア神話』岩波書店、2008年
- 7 桜井万里子『古代ギリシア社会史研究』岩波書店、1996年
- 8 Frank Sear, John Bennet, John Boardman, J.J. Coulton, Donna Kurtz, R.R.R. Smith, Margareta Steinby, *Roman theatres: an architectural study*, Oxford: University of Oxford Press, 2005
- 9 逸見、前掲書
- 10 プラトン「饗宴」
- 11 G.W.F.ヘーゲル「精神現象学」長谷川宏 訳、作品社、1998
- 12 ラカン「精神分析の倫理上・下」小出浩之 訳、岩波書店、2002年
- 13 S・ティドワース「劇場：建築・文化史」白川宣力、石川敏男 訳 早稲田大学出版部、1986年
- 14 Doxiadis, *Architectural Space in Ancient Greece*, The MIT Press, 1977 (参考文献リスト)

・**公共と芸術について**:リチャード・セネット『公共性の喪失』北山克彦・高階悟訳、晶文社、1991年/ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994年/アンリ・ルフェーブル『都市への権利』森本和夫訳、ちくま学芸文庫、2011年/ジャック・ランシエール『解放された観客』梶田裕訳、叢書ウニベルシタス、2013年

・**政治と演劇について**:Jan Deck, Angelika Sieburg (Hg.), *Politisch Theater machen, Neue Artikulationsformen des Politischen in den darstellenden Künsten*, 2011 / S.メルヒンガー『政治演劇史』尾崎賢治・蔵原惟治 訳、白水社、1976年

・**アテナイの祭儀について**:パウサニアス『ギリシア案内記』馬場恵二 訳、岩波文庫、1991年 / Parke, *Festivals of the Athenians*, 1971 / 桜井万里子『古代ギリシア社会史研究』岩波書店、1996年/ヴァルター・ブルケルト『ホモ・ネカーニス—古代ギリシアの犠牲儀礼と神話』前野佳彦 訳、法政大学出版局、2008年/フランソワ・シャム『ギリシア文明』桐村泰次 訳、論創社、2010年

・**ギリシア演劇について**:Rush Rehm, *Greek Tragic Theatre*, London and New York: Routledge, 1994 / 逸見喜一郎『ソフォクレス『オイディプス王』とエウリーピデース『バツカイ』—ギリシア悲劇とギリシア神話』岩波書店、2008年

・**ギリシアの建築(神殿と劇場)について**:Constantinos A. Doxiadis, *Architectural Space in Ancient Greece*, The MIT Press, 1977 / Frank Sear, John Bennet, John Boardman, J.J. Coulton, Donna Kurtz, R.R.R. Smith, Margareta Steinby, *Roman theatres: an architectural study*, Oxford: University of Oxford Press, 2005 / 渡邊道治「ギリシア・ローマ時代の劇場建築について」日本建築学会九州支部研究報告第39号、2000年3月